

## 4. 昆虫類

### (1) 調査概要

#### 1) 調査方法

対象種のハビタットの現地調査と文献調査を行った。しかし、大矢野原のオオウラギンヒョウモンの生息地は自衛隊の演習地であるために十分な現地調査は行えなかった。また、九折瀬洞も特殊な環境で文献調査だけとなった。

昆虫類のハビタットはRDBのカテゴリーが絶滅危惧Ⅱ類以上で、ある程度集中的に生息している種を選定し、その生息地をハビタットに指定した。まず、種としては国の天然記念物であるゴイシツバメシジミ、熊本県指定希少野生動植物のモートンイトトンボ、グンバイトンボ、コバネアオイトトンボ、ハッチョウトンボ、オオルリシジミ、ミドリシジミ、ウラジロミドリシジミ、オオウラギンヒョウモンの8種である。

保護区が指定されているのはモートンイトトンボ、ハッチョウトンボ、オオルリシジミの3種である。

今回ハビタットに選定したのはグンバイトンボ、コバネアオイトトンボ、オオルリシジミ、オオウラギンヒョウモンの4種の生息地である。前回選定していたハッチョウトンボのハビタットは保護区に指定したので除外した。

次に洞窟内を生息地としているツヅラセメクラチビゴミムシ、ドウクツケシガムシが生息している2ヶ所のハビタットを選定した。

その結果、5つの単一ハビタットと3つの複合ハビタット（大瀬洞、内大臣、市房山）を設けた。

#### 2) 調査結果の概要

グンバイトンボ生息域は現在県内では阿蘇地域に限定されている。中原川水系とその支流では平成24年の水害により生息地であるツルヨシの生育地に大きな被害が生じた。また、河川の改修工事でも多くのツルヨシ群落が消失した。

コバネアオイトトンボは現在山鹿市一ツ目湿地だけに生息している。一ツ目湿地は面積も狭く、ホテルのための公園化、駐車場造成、休耕田の放棄および遷移の進行で、生息環境が急激に悪化している。また、マニアによる採集でも危機的な状況となっている。

県内のオオルリシジミ生息地で一番個体数が発生していたのが鍋の平キャンプ場である。何度かマニアが不法に採集し逮捕された。しかし、地震により阿蘇地域全域でオオルリシジミの個体数が激減した。鍋の平も例外でなかった。

オオウラギンヒョウモンのハビタットである大矢野原演習場は、危険であるために調査には入れなかった。

ツヅラセメクラチビゴミムシは九折瀬洞だけに生息する固有種で、平成12年に行われた調査では安定した生息状況であった。その後の調査はなされていないが、特別な変化はないと思われる。この洞窟には固有種も多く確認されている。

大瀬洞固有種であるドウクツケシガムシについては、2002年までは個体数が比較的多かったが、2003～2005年は全く確認できなかった。その後、2006年に1頭、2007年に3頭が、かろうじて確認された。本種は、急激に個体数を減らしており、このままでは絶滅してしまう可能性が非常に高い。種名が確定していないが、グアノの中に生息しているエンマムシの一種も2004年以降、生息数が激減しており、ほとんど確認されなくなった。

内大臣と市房山には特定動物生息地保護林が設定され、ゴイシツバメシジミの生息地となっている。内大臣ではシカの食害による林内の乾燥化が進行している。また、マニアによる採集も行われている。市房山では十分な監視体制が行われ、採集圧はあまり見られない。

### 3) 今後の課題

グンバイトンボは河川工事での汚濁防止措置とツルヨシの除去と管理が必要である。

コバネアオイトトンボは一部が山鹿市の管理地であるために、繁茂したガマなどの除去、休耕田の湿地化を早急に行う必要がある。

オオルリシジミとオオウラギンヒョウモンについては、マニアによる採集を防止しなければならない。

内大臣のゴイシツバメシジミの生息地については国の嚴重な監視が行われている。しかしマニアによる密猟は後を絶たず、特に林道沿いでのトラップを用いた採集が行われている。さらに原生林内でも、幼虫の食草であるシシンランが盗掘され、生息に悪影響を及ぼしている。その他にもシカの食害による林内の乾燥や崩落などの自然災害による生息地の消滅などがあり、対策が求められる。

市房山のゴイシツバメシジミのハビタットは、十分な監視が行われており、採集に対する危惧はない。しかし、台風などの自然災害での樹木の破損やシシンランの減少、シカの食害による林内の乾燥が認められる。また、生息地に隣接した場所は、伐採、植林が行われた土地であるため、ゴイシツバメシジミの大敵である乾燥には留意しなければならない。クリ害虫への薬剤散布の影響の有無も明確ではない。

九折瀬洞のハビタットは、川辺川ダムの建設が中止となったが、地震による被害はまだ不明である。早急に調査を行う必要がある。

## (2) ハビタットの解説

5ヶ所について、以下で解説する。

## 1 一ツ目湿地

山鹿市久原

熊本県カテゴリー

4 緊急に対策が必要

### 【保護対象種】

コバネアオイトトンボ(CR)

### 【選定基準】

- A 国内において極めて稀な種が生息しているハビタット
- B 県内において極めて稀な種が生息しているハビタット
- E 特殊な立地（砂丘・断崖地・塩沼池・湖沼・河川・湿地・高山・石灰岩地・洞窟・干潟・岩礁など）に特有な種が生息しているハビタット
- F 乱獲その他の人為的影響によって、県内で極端に少なくなるおそれのある種を含むハビタット
- H 熊本県版RDB・RLにおいて、絶滅危惧又は準絶滅危惧とされる種を含むハビタット

### 【概要】

山鹿市久原の一ツ目神社周辺は県内唯一のコバネアオイトトンボの生息地である。ここには豊富な湧水があり、熊本県ホテル百選にも指定されている。周りにある2つの大きな池は農業用だけでなく養魚場としても利用されており、冬季には水落としが行われている。また、多くの人が採水に訪れている場所でもある。このハビタットには2009年ごろには49種のトンボが確認されていたが、現在では20種ほどに減少している。

### 【現状】

この一ツ目神社の湿地が本種の県内における唯一の生息地である。湧水は豊富に保たれているが、トンボ類の生息に必要な湿地は急激に減少した。減少の要因はホテル保護のために公園が造成され、セメント張りの水路ができ、また神社前には駐車場も整備された。下の池に流れ込むアシ、ガマなどの見られた休耕田も植生の遷移が急激に進行し、他のトンボにも大きな影響を与えた。現在確認できるコバネアオイトトンボは年間を通して10個体以下である。ここ5年では2~4個体のときもあった。レッドデータブックに選定しているコフキヒメイトトンボが見られた湿地も陸地化し消滅した。また、多数確認されていたキトンボも現在ほとんど見られない。秋に多く見られたアキアカネ、ノシメトンボ、コノシメトンボ等のアカネ類も激減している。早急な保全対策が望まれる。本種は熊本県の指定希少野生動植物に指定され、採集等が禁止されているが、マニアによる採集も見られる。

## 2 中原川水系

阿蘇郡小国町・南小国町中原川水系

熊本県カテゴリー

3 対策が必要

### 【保護対象種】

ゲンバイトンボ(CR)

### 【選定基準】

- A 国内において極めて稀な種が生息しているハビタット
- B 県内において極めて稀な種が生息しているハビタット
- E 特殊な立地（砂丘・断崖地・塩沼池・湖沼・河川・湿地・高山・石灰岩地・洞窟・干潟・岩礁など）に特有な種が生息しているハビタット
- F 乱獲その他の人為的影響によって、県内で極端に少なくなるおそれのある種を含むハビタット
- H 熊本県版RDB・RLにおいて、絶滅危惧又は準絶滅危惧とされる種を含むハビタット

### 【概要】

中原川は南小国町マゼノ溪谷域を源流とする河川で、小国町下城で筑後川に合流する。県内における本種の生息域は県北地域（小国町と南小国町）である。この水系には、ニホンカワトンボ、アオハダトンボ、アオサナエなども生息している。

### 【現状】

生息地は河川の流れの速い本流でなく、ツルヨシが見られる流れの緩やかなところである。上流域では堰の上・下流域の少し開けたところに生息している。中流域では川幅が広がって緩やかな流れのツルヨシの間に見られる。しかし、平成24年の九州北部の大水害（7・12）で生息地は致命的打撃を受けた。特に中原川本流では土砂の流入、改修工事で大型重機が入り、土砂以外にツルヨシ群落も除去され、多くの生息地が消滅した。また支流の湯田川の生息地では、ツルヨシが刈り取られ放置されているために生息環境が悪化している。また本流域に見られたニホンカワトンボ、アオハダトンボ、アオサナエの個体数も急激に減少している。

### 3 鍋の平

#### 高森町鍋の平

熊本県カテゴリー

2 破壊の危惧

#### 【保護対象種】

オオルリシジミ(CR)

#### 【選定基準】

- A 国内において極めて稀な種が生息しているハビタット
- C 熊本県固有種が生息しているハビタット
- F 乱獲その他の人為的影響によって、県内で極端に少なくなるおそれのある種を含むハビタット
- G 模式標本となっている個体の産地など、学術上重要なハビタット
- H 熊本県版RDB・RLにおいて、絶滅危惧又は準絶滅危惧とされる種を含むハビタット

#### 【概要】

根子岳山麓の当該ハビタットには指定希少野生動植物のオオルリシジミ、希少なシルビアシジミを産する短草型草原がある。ここはキャンプ場を有するために草刈が行われ、春先にはオオルリシジミの食草であるクララやシルビアシジミの食草であるミヤコグサが多数見られる。他にも草原性のヒョウモン類が見られ、放牧場と隣接することから食糞性コガネムシも産する。

#### 【現状】

オオルリシジミの発生状況はここ数年で激減している。特に震災後には急激に個体数が減少した。しかし、少数ながら生息しているので、現在の管理が継続される必要があり、本種の生息地として重要なハビタットになる。本地の北斜面一帯はかつて同じ短草型草原だったが、植栽された樹木が成長し、牧場外にあった短草型草原が急激に減少し、シルビアシジミも減少した。

オオルリシジミは熊本県全域での採集が禁止されているが、マニアによる成虫や幼虫の捕獲がある。そのために警察と地元の方々によるパトロールも行われている。

### 4 大矢野原

#### 山都町大矢野原

熊本県カテゴリー

2 破壊の危惧

#### 【保護対象種】

オオウラギンヒョウモン(VU)

#### 【選定基準】

- A 国内において極めて稀な種が生息しているハビタット
- F 乱獲その他の人為的影響によって、県内で極端に少なくなるおそれのある種を含むハビタット
- H 熊本県版RDB・RLにおいて、絶滅危惧又は準絶滅危惧とされる種を含むハビタット

#### 【概要】

オオウラギンヒョウモンの生息する当該ハビタットは阿蘇の南外輪外側に広がる草原で、陸上自衛隊の演習場である。全国的にも本種の生息地となっているのは自衛隊の演習場が多い。近年は農業形態の変化で草原が急激に減少しているが、大矢野原演習場では採草、放牧、野焼きが行われており、広い草原が維持・管理されている。また、フン虫類も多くみられる。演習場であるために一般の人の出入りがなく、貴重な動植物の生息・生育地で、演習場内が貴重な動植物の保護区となっている。

#### 【現状】

オオウラギンヒョウモンの発生状況はここ10年近く特別な変化は起こっておらず、安定した生息地である。本地にはキマダラモドキ、ウラギンスジヒョウモンなど多種の蝶類が生息している。また、近年減少した植物も多く見られる。これらは自衛隊の演習場であるために守られてきたものである。本種は熊本県の指定希少野生動植物のために採集等が禁止されているが、全国的には最近個体数が微増している。しかし、自衛隊とトラブルを起こして問題となっている場合もある。演習場では年間300日近く演習が行われているため、不法な行為がもとになって生命に係わる事態となる恐れがある。現在では安全面での危惧があるために、立ち入り調査も困難である。

## 5 九折瀬洞

### 五木村九折瀬

熊本県カテゴリー

### 2 破壊の危惧

#### 【保護対象種】

ツヅラセメクラチビゴミムシ(CR)

#### 【選定基準】

- A 国内において極めて稀な種が生息しているハビタット
- B 県内において極めて稀な種が生息しているハビタット
- C 熊本県固有種が生息しているハビタット
- G 模式標本となっている個体の産地など、学術上重要なハビタット
- H 熊本県版RDB・RLにおいて、絶滅危惧又は準絶滅危惧とされる種を含むハビタット

#### 【概要】

川辺川左岸に見られる九折瀬洞は、高さ 3m、幅 6m で総延長は 1,186m である。ツヅラセメクラチビゴミムシはコウモリの糞塊（グアノ）などを餌とするキュウシュウホラトゲトビムシなどの小動物を捕食する。また、ヒゴツヤムネハネカクシ、ホラアナヒラタゴミムシの一種も確認されている。特に、ツヅラセメクラチビゴミムシは九折瀬洞特産種、ヒゴツヤムネハネカクシは熊本県特産種であり、これらの種を産する極めて重要なハビタットである。

#### 【現状】

このハビタットで確認されている種は 7 目 13 科 17 種である。このハビタットに生息する生物に一番影響するのが川辺川ダムの建設であったが、ダム建設が中止になり、安定した生息地となっている。しかし、近年起こる大水害等では危険な状況になる可能性はある。

### (3) 文献

1. 建設省九州地方建設局川辺川工事事務所（2000）川辺川ダム事業における環境保全への取り組み。